

2022 年度

国 語

最初に、以下の^{ちゅうい じこう}注意事項をよく読んでください。

1. 問題冊子は^{かんとくしや}監督者の指示があるまでは開いてはいけません。
2. 監督者の指示にしたがって、解答用紙に受験番号と氏名を記入してください。問題冊子は受験番号のみを記入してください。
3. 試験問題の内容に関する質問には答えられません。それ以外の用事があるときは手をあげてください。
4. 受験中気分が悪くなったときは、監督者に申し出てください。
5. 解答用紙は持ち帰らないでください。
6. 漢字で書くべきところは漢字で書いてください。

受 験 番 号	
------------------	--

*解答に字数制限がある場合は、句読点なども字数として数えます。

【一】 次のそれぞれの問いに答えなさい。

問一 ①⑥の——線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- ① 大金をヒロウ。
- ② スポーツのサイテンが開かれる。
- ③ 各駅にテイシヤする。
- ④ 完全ネンシヨウする。
- ⑤ ビルをケンセツする。
- ⑥ 店のカンバンをとりかえる。

問二 次の熟語と同じ成り立ちのものを一つ選び、記号で答えなさい。

「永久」

- ア、暗示 イ、遠近 ウ、測量 エ、日照

問三 次の四つの漢字は、ある共通する部首をつけると別の漢字を作ることができる。その部首名をひらがなで答えなさい。

方・余・完・章

問四 次の四字熟語と似た意味のことわざ、または慣用句を一つ選び、記号で答えなさい。

「付和雷同」

- ア、えびでたいをつる イ、飛ぶ鳥を落とす ウ、しり馬に乗る エ、あぶはち取らず

問五 次の()に入る漢字の総画数を漢数字で答えなさい。

下手の() () 好き

【二】 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

家に帰ったのは、日もすっかり沈んだあとだった。

玄関のドアを開けると、お母さんが「こんな時間までなにしてたの！」と大声で駆け寄ってくる。それに対してわたしはなにも言えなかった。

「……どうしたの、由加」

目を真っ赤にしているわたしに気づいて、お母さんが声色を変える。

「おか、さん……」

優しい声に力がふっと抜けて、流し尽くしたはずの涙がまたぼろぼろとこぼれ落ちた。

お母さんは慌てふためき、わたしを抱きしめてくれた。そのままとりあえず家の中に入るように促されたので、嗚咽混じりに泣きながらソファに腰を下ろす。

温かい紅茶を淹れてきてくれたお母さんは、そのままわたしの隣に座った。

「なにがあったの？」

わたしの手を握りしめて、お母さんが聞く。

なにか話せばいいのだろう。なにをどう伝えたらいいのだろう。頭の中がぐちゃぐちゃに乱れているし、声もうまく出せない。ひつくひつくとしゃつくりをしながら、乾き始めた涙を手の甲で拭って紅茶を一口飲んだ。

お父さんも家にいるはずだけれど、姿は見当たらなかった。きっと気を遣って別の部屋にいるのだろう。深呼吸を数回繰り返してから、やっと口を開く。

「わたしがひとりになったとき、そばにいてくれたのがゆうくんだった」

「……そう」

「でも、わたしはずっとゆうくんを傷つけてた。そばにいるって約束したのに、引越してから連絡もなくなって、中学でも自分がひとりになるまで話しかけもしなかった……だから、わたしのこと、信じられないって」

お母さんはさつきよりも小さな声で「そうなの」と囁く。

「でも……それでもやっぱり、わたしはゆうくんのそばにいたい」

これまでに、どれだけ傷つけてしまっていたとしても、今までゆうくんの気持ちを知ろうとしなかったとしても。ううん、だからこそ、これからのゆうくんの隣にいたいと思う。

「勝手なのかな、わたし……」

立ち去ったゆうくんを、本当は追いかけたかった。

なにを言われても、手を離さずに引き止めたかった。でも、そんなことをしたら、もっと嫌われてしまうかもしれないと思うと、体が動かなかった。

「……みんなが思ってるような子じゃないんだよ、ゆうくん」

たしかに、今のゆうくんは、髪の毛を染めて制服を着崩して、学校をサボる。人を寄せ付けないようにしているところもある。

でも、それは、誰のことも信用できないからだ。

それでもゆうくんはわたしを邪険にはしなかった。

迷子になったわたしの手を引いてくれた幼いときと変わらず、ひとりになったわたしのそばにいてくれた。

「涼ちゃんたちがいなくなったわたしの世界に、ゆうくんがいてくれた。たくさん、助けてくれた」

涼ちゃんたちがいない日々は、苦しくて悲しい時間だった。

でも、ゆうくんがいてくれた。特別ななにかをしたわけでも、どこかに行ったわけでもない。けれど、ゆうくと過ごすほんの少しの時間は、わたしにとつての特別な時間だった。

苦しくて悲しい時間が、ゆうくと過ごすことで溶けていった。

③「お母さんのせいね」

ぎゅっと抱きしめられて、お母さんが耳元で言った。

「どういふことかわからず顔を上げると、お母さんは
1 眉根を寄せて「ごめんね」とわたしに謝る。
「悠真くんのお母さんが、悠真くんに対して厳しかったのは覚えているわよね」
こくりとわずくと、お母さんはゆっくりと話を続けてくれた。

わたしが小学校に入学してすぐに、ゆうくんのお母さんから連絡があったこと。それは今後、ゆうくんを遊びに誘わないようにしてくれという内容だったこと。そして、同じ内容の連絡が、当時ゆうくんの友だちだった子の親全員に来ていたこと。

そして、ゆうくんのお母さんは、わたしがゆうくんに習い事をサボらせて海に連れ出したことでも、すぐ怒ったそうだし、それからしばらくして引越したわたしは、何度もお母さんに「ゆうくんと遊びたい」とせがんだ記憶がある。それでもゆうくんと遊ぶことが叶わなかったのは、『悠真は今忙しいから』という理由でいつもゆうくんのお母さんに断られていたからだと
いう。

きつと、ゆうくんには電話がかかってきていたことすら知らされていなかったのだろう。

「本当のことを言ったら……由加が傷つくかと思って黙ってたけど、ちゃんと言えばよかったわね」

「……ゆうくんの、お母さんとは、今は……?」

「ここ数年連絡を取り合っていないから、今はどういふ考えで悠真くんと接しているのかわからないの。でも、悠真くんが問題を起すようになったのは、ご両親との関係が原因なのかもしれない、とはなんとなく思っていたの」
そうだったんだ。

わたしが最近ゆうくんと仲よくしていることに対して、お母さんが難色を示した理由がなんとなくわかった気がする。

実際わたしが幼い頃、ゆうくんのお母さんは「悠真は本当は忙しいのに……由加ちゃんが来ると断れないのよねえ」とたびたび口にしていた。

幼い頃は優しい口調だけを感じとって、その言葉の意味に気づけなかったけれど、お母さんから話を聞いた今のわたしなら、それが嫌味だとわかる。

わたしには、知らないことがたくさんあった。

「お母さん、わたし……ゆうくんともう一度、話がしたい」

なにも知らないからって、傷つくのも傷つけるのも、もう嫌だ。

「でも——ゆうくんは許してくれないかもしれない」

「なんで由加はそう思うの？」

もう二度と笑ってくれないかもしれないと思うと、「A」がすくんでしまう。

だって、わたしは許せない。なにもなかったみたいになんか笑えない。

「……わたしに、友だちがいなくなったのは、涼ちゃんに裏切られたからなの」

ぎゅつと目をとじ、ずつと言えなかった言葉の口にする。

「涼ちゃんがウソをついてるのに、友だちはみんな涼ちゃんを信じて、誰もわたしの話を聞いてくれなくて……すぐくつらかった。悲しかった。たとえどんな理由があっても……わたし、それをなかつたことにできない」

あの日の放課後、校門で待っていた涼ちゃんの話は聞かなかったのは、謝られたら許さなくちゃいけない気がしたからだ。頭を下げてくれたにもかかわらず、それを受け入れられなかったら、自分がすごく心が狭くて嫌な人間みたいで。だから、逃げたんだ。

「……だから、お菓子も、涼ちゃんたちには渡せなくて……ほとんど、ゆうくんとふたりで食べてたの」

「そうだったの。言ってくれたらよかったのに」

「言いたくないよ、こんな、友だちがいなくなつただなんて、かつこ悪いこと……知られたくなかつた」

心配かけたくなかつたというのものもあるけれど、それよりも、最後までわたしのことを信じてくれるような友だちがひとりもいなかったことを知られるのが恥ずかしかつた。学校でひとりぼっちでいるなんて、お母さんが知つたらどう思うのか考えるだけで苦しかつた。

涙をぼろぼろとこぼしながら唇をとがらせると、お母さんは

2

笑つてから、

「変なところで頑固がんこなんだから」

と言った。

「許したくないなら、許さなくてもいいと思うわ。相手を憎にくむようなことさえなければ、無理に許す必要もないんじゃないかな。お母さんだって、お父さんのことで今も許してないことたくさんあるわよ。結婚記念日けっこんを忘れてたこととか、誕生日たんじょうびにお酒を飲んで帰ってきたこととか」

子どものように頬ほおをふくらませて、お母さんがすねる。

「傷ついた分だけ、許すのが難しいこともある。頑張がんばって許す必要はないわ」

「……いいの？」

「もちろん。傷ついた気持ちは由加のものなんだから」

そう言っ、お母さんはわたしを安心させるように「B」を細めた。

「でも、相手の考えを知らないままだと、余計にシコリになって残ったり、いつかは許せるかもしれないことが許せないままかもしれない。だから、話は聞いておいたほうがいいかもしれないわね。そのあとで、無理なら逃げればいいのよ」

そうなのか。

涼ちゃんたちの話も聞いたあとで、考えてもいいんだ。そして、許さなくてもいいんだ。⑥ そう思うと体から力が抜けた。と、同時に。

「それって、ゆうくんが許さない可能性もあるってこと、だよね」

「もちろん、そういうこともあるわね」

それは、やだな。

「許してほしいから、謝るの？ 悪いことをしたから、謝るんじゃないの？」

お母さんが、優しく温かい手でわたしの頬を包む。

「許してくれないかもしれない。だからってなにも伝えなかつたら、ここで終わっちゃうわよ」

このまま、ゆうくと別れたままになるのは嫌だ。

話をしたい。ちゃんと伝えたい。

それは、許してもらうためじゃない。

許してもらうのは、その先の自分の行動を見てもらうしかない。

⑦「ゆうくんにながったのか、ゆうくんがどう思っているのか知りたい。それから、自分の気持ちも、話してくる」
涙でうるむ瞳を見開いて、顔を上げる。

お母さんはこくりとうなずいて「頑張って」と言ってくれた。

話が終わったことを察したのか、しばらくするとお父さんが顔を出して「そろそろごはんにするか」と声をかけてきた。晩ごはんがまだだったことを思い出すと、お腹がくうつと小さく鳴る。

「あ、お母さん」

準備をするために立ち上がったお母さん呼び止める。

「あの、月曜日に、お母さんの作ったお菓子を学校に持っていきたいんだけど……」

新しくできた友だちが、お母さんのお菓子を気に入ってくれていたの、と言葉を付け足すと、お母さんは「まかせなさい」と胸をどんと叩いた。

「あ、できたらドライフルーツ入りのが……いいな」

それだけでお母さんは察してくれたらしく、

3

笑ってうなずいた。

（櫻いいよ『世界は「」で満ちている』（PHP研究所）より）

問一

1

3

に入ることはとして適切なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。(ただし、同じものは使えない。)

- ア、困ったように イ、あせったように
ウ、申し訳なさそうに エ、うれしそうに

問二

~~~~線部X・Yの本文における意味として適切なものを次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

X「邪険にはしなかった」

- ア、普段ふだんよりも氣遣きぢってくれた  
イ、だましたり孤立こりつさせたりしなかった  
ウ、冷たくつき放はなすことはしなかった  
エ、ひとりで守ろうとしてくれた

Y「難色なんしきを示した」

- ア、想像できなかった  
イ、説明できなかった  
ウ、反対できなかった  
エ、賛成できなかった

問三

【A】、【B】に入る体の一部を表すことばを、それぞれ漢字一字で答えなさい。

#### 問四

——線部①「お母さんが声色を変える」とあるが、このときのお母さんのようすとして適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、帰る時間がおそかったことを心配するあまり、急に由加をしっかりとつけたことを後悔こうかいしている。
- 2、早く帰ってこなかったことに大声をあげてしまったが、由加が極度に落ちこんだのを見てたじろいである。
- 3、帰ってきた由加の様子がいつもとは違うちがうことに気づき、いったい何があったのかと心配している。
- 4、帰りがおそい由加にあきれていたが、娘が泣きながら帰ってきた理由が分からず困っている。

#### 問五

——線部②「わたしにとっての特別な時間だった」とあるが、それはなぜか。その理由として適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、友人に裏切られてひとりになった由加のそばに、昔のようにゆうくんがいてくれたことで救われたから。
- 2、ゆうくんはひとりぼっちの由加を遊びにさそい、友人に裏切られた苦しさや悲しさを忘れさせてくれたから。
- 3、人を寄せ付けないようにしているゆうくんが、由加にだけは心を許してくれたことがうれしかったから。
- 4、友人と上手いかず悩なやんでいた由加が、ゆうくんとは互いに気持ちを理解し合うことができたから。

#### 問六

——線部③「お母さんのせいね」とあるが、それはなぜか。その理由として適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、ゆうくんと由加を遊ばせることについて、彼のお母さんと口論をしてしまったから。
- 2、由加がゆうくんに習い事をサボらせたことを、彼のお母さんに謝らなかつたから。
- 3、自分たちの引っ越しを、由加の親友のゆうくんと彼のお母さんに話していなかつたから。
- 4、由加を傷つけないために、ゆうくんのお母さんとの会話の内容を伝えてこなかつたから。

問七 — 線部④「それが嫌味だとわかる」とあるが、どういうことか。それを説明した次の文の（ ）にあてはまるように

四十字以内で答えなさい。

悠真のお母さんは、（ ） 四十字以内 （ ） こと。

問八 — 線部⑤「ずっと言えなかった」とあるが、それはなぜか。その理由を説明した次の文の（ 1 ）、（ 2 ）にあて

はまるようにそれぞれ十五字以内で答えなさい。

（ 1 ） という気持ちと、自分を（ 2 ） ことを知られるのが恥ずかしかったから。

問九 — 線部⑥「そう思うと体から力が抜けた」とあるが、このときの由加のようすとして適切なものを次の中から一つ選び、

番号で答えなさい。

- 1、母の言葉で、友人に対して悪いことをしていないから許さなくてもよいと知ってほっとしたから。
- 2、相手の考えが分かってても、無理をしてまで許すことはないと感じて気持ちが楽になったから。
- 3、自分の気持ちを優先していい時もあると言われ、自分が肯定こうていされたように感じてうれしかったから。
- 4、大人になっても許せないことはあると聞いて、自分が頑張こつてってまで許す必要はないと安心したから。

問十 — 線部⑦「涙でうるむ瞳を見開いて、顔を上げる」とあるが、このときの由加のようすとして適切なものを次の中から

一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、ゆうくんのことを大切に思っている気持ちを正直に伝えて、自分のことを理解してもらおうと思っている。
- 2、許してもらえなかったとしてもゆうくんと誠実に向き合い、気持ちを行動で表そうと決意している。
- 3、気持ちを話せばゆうくんは許してくれると思い、自分が後悔しないために行動したいと考えている。
- 4、傷ついているゆうくんに何もできなかったことを恥じ、許してくれない可能性もあると覚悟かくごしている。

### 【三】 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

#### 1 なぜフィールドワークが必要か

知りたい情報は書かれていない

何かについて知りたいと思ったとき、まずは、誰かがそれについて調べていないだろうか、書いていないだろうか、と考えます。それを調べるのが、前の章で解説した文献・資料調査です。記事・論文、本、新聞記事、そして統計と形こそ違え、いずれも誰かが大事だと思って調べ、根拠を示しながら書いているものですから、たいへん有効なものです。さらには、筋立てて書いてくれていますので、物事の因果関係もよくわかります。

1 言ってしまうえば、文献や資料に載っていることは、この世の現実の一部にすぎません。誰かが調べてくれている、と言っても、それはあくまでその人の視点で調べたものです。書かれている因果関係は、その人の視点と方法による分析です。それが自分が調べたいことと、ずばり一致するということは、なかなかありません。

知りたい情報は、なかなか書かれていないのです。

私たちは、一人ひとりが無数の知られざる「情報」をもっています。私が朝何を食べたか、私はどういう友人関係をもっているか、私は今の政治についてどう考えているか、私は地域社会のなかでどんな役割を果たしているか、私の職場ではどんな隠れたルールがあるか。どうしてもよさそうな情報から大事な情報まで、私たち一人ひとりは、数え切れないほどの情報をもっています。しかし、そうした情報は、一部は自分しか知らないし、一部は身近な人しか知りません。それらの情報は、ほとんどどこにも「書いて」いませんし、誰かから調査を受けたこともありません。SNSに頻繁に文章を上げている人でさえ、実際に上げているのもっている情報のごくごく一部でしょう。

調べる側からすれば、ある事象について調べたいと思った場合、それがすでにあらゆる角度からあらゆることについて書かれていることはまずありません。

世の中の情報の九九・九%は、書かれないまま、眠っています。

と考えれば、私たちのもつ「常識」は案外狭い情報や知識によるもので、ある意味、ほとんどが思い込みだとさえ言えるかも

しません。

### 自分たちの認識を問う

私たち一人ひとりの認識、たとえば今の世の中はもったこうあるべきだとか、最近の社会はこんな傾向があるとかいった認識が、いったい何をもとにできあがっているのか、もう一度考えてみてもよいかもしれません。どの人の認識の形成プロセスも【A】ではないと思いますが、おそらく、家族、友人関係のなかでつちかわれた感覚、学校、メディア、その他からの情報、そういった案外限られたものなから形成されていると思っただけのほうがよいかもしれません。

自分の認識から外れるような情報に接したとき、私たちは「そんな話、聞いたことがない」と、無視したがる傾向にあります。しかし、それは、ただ「聞く」、「調べる」という作業をしていないために情報が入らなかつただけだと考えたほうがよいでしょう。テレビのニュースを見て、ネットを眺めていてだけでさまざまなことがわかるなどということは、まずありません。

○問題をめぐる住民どうしが対立している、という報道に接し、実際に行ってみて、いろいろな人に詳しく聞いてみると、じつは「対立」ではなく「意見の相違」くらいで、しかも意見は二つにわかれているのではなく、三つにも四つにもわかれている、ということがわかったりします。そもそも「○問題」というフレーム(枠組み)すらあやしい、ということも見えてきます。

このように、現場に出かけ、見て、話を聞くことで実際の姿に迫ろうとすること、それがフィールドワークです。

フィールドワーク、と一言で言っても、いろいろなものがあります。山のなかに入ってからどんな植物が生えているか調べるのもフィールドワークですし、大都市の駅前で人の流れを観察するのもフィールドワークでしょう。一軒一軒訪ねて話を聞くというフィールドワークもありますし、企業や行政に対してインタビューを行うのもフィールドワークです。あるNPOの活動にしばらく参加させてもらって、なかから観察するのもフィールドワークですし、工場に入って一緒に働いてみるのもフィールドワークです。

2

③

考え方の枠組みが壊れる

2

、こうしたフィールドワークを経験した人の多くが実感することがあります。それは、フィールドワークをするこ

とで、単に現場でデータを得るということ以上のものが得られる<sup>a</sup>、という実感です。「現場がやはり大事だ」と経験者はよく言います。

単にデータを得るということ以上のものがある、とはどういうことでしょうか。

一つには、現場では、単にデータが得られるだけでなく、私たちがもっているフレーム（考え方の枠組み）そのものが壊れたり再構築されたりすることが多いということです。フレームは、おおまかな仮説かせつと言ってもよいかもしれませんが。こういうことを知りたくて、現場に行く。こういうことを考えて、フィールドで調査する。すると、その「こういうこと」の妥当性たうたせいがそこで揺らぐのです。これは人がとってきたデータだけを見たり、遠隔えんかくで調べたりしているときには生じにくい現象です。

現場に身を置いて、現場の雑多な「ものごと」に注意深く耳を傾けるかたむことで、私たちのなかにあった仮説、調査の【B】として考えていたフレームが壊れていきます。

⑤現場は、でこぼこしています。あらかじめ読んでいた文献の知識をたずさえて現場に行ってみると、文献に書かれているような単純なことではないことがわかります。そのでこぼこさに身を置くことによって、あらかじめもっていたフレームが壊れ、また、修正を余儀なくよぎされます。

あらかじめつくっていた調査事項を修正し、フレームを修正し、さらに調査が続きます。調査のプロセスでは、フレームは何度も何度も修正する必要があります。それがフィールドワークのおもしろさです。

とくに人びとにかかわる調査、社会にかかわる調査では、私たちがどんなフレームをもっていようと、調べる対象である人びとも彼らかれら自身のフレームをもっています。私たちが社会を解釈かいしゃくしようとする前に、人びとも、社会を解釈しているのです。こちらの解釈と人びとの解釈がぶつかりあい、ひびきあうことで、新しい解釈が生まれます。このプロセスはとても大事で、フィールドワークなしの認識が信用できないのは、そうしたプロセスを経っていないからです。

### 学びの場としての機能

3、フィールドワークはそういう性質ゆえに、<sup>⑥</sup>「学び」の場としての機能も強くもっています。

私たちは、知りたいことすべてについてフィールドワークをすることはできません。しかし、フィールドワークの経験によって、そうやって雑多な情報がうごめく現場の感覚、そこからフレームが壊れ再構築されていく感覚を身につけることができます。論文や記事を読む際にも、メディアの情報に接する際にも、そうしたフィールドワーク感覚が、それらを<sup>⑦</sup>に読む素地、

⑧ に読む素地になります。フィールドワークには、認識を深化させる練習場としての機能があると言えるでしょう。

文献調査では「○○と△△が原因で××になった」と書いてあっても、実際に現場に行ってみると、もう少し【C】であることがわかります。○○と△△だけが原因とも言えなさそうですし、完全に「××になった」とも言いきれないことがあるようです。しかし、そうしたことをいろいろ現場で調べ、考えて、分析してみると、結局のところは、つづめて言えば、「○○と△△が原因で××になった」という、文献の文言と同じ言い方にならざるをえないこともあります。それでも、文献でそう書かれていたのをただ表面的になぞって理解するのと、実際に現場でいろいろ感じて、聞いて、調べて、深く「そうだ」と理解するのとでは雲泥の差があります。

文字面もじづらの向こうにあるもの、表面的な情報の向こうにあるものを想像できるような感覚を身につける。認識のプロセスこそが重要であるという感覚を身につける。フィールドワークは、単にデータを得るだけでなく、そうした「姿勢」を身につける学びの場でもあります。

(宮内泰介・上田昌文『実践 自分で調べる技術』(岩波新書)より)

問一 1 3 に入ることばとして適切なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。(ただし、同じ

ものは使えない。)

ア、さらに                      イ、したがって                      ウ、しかし                      エ、ところで

問二 【A】～【C】に入る二字のことばを次の漢字を組み合わせてそれぞれ作りなさい。

単 後 示 簡 前 雑 体 多 複 提

問三 〓線部 a と同じ用法のものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、手伝いをしてほめられる。

イ、春の気配が感じられる。

ウ、先生は六時に来られる。

エ、本は三冊まで借りられる。

問四 〓線部 b の本文における意味として適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

「余儀なくされます」

ア、するわけにはいかなくなります

イ、しないわけにはいかなくなります

ウ、することがつらくなります

エ、しないことがつらくなります

問五 〓線部 c と同じ内容を表す慣用表現として適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、あうんの呼吸      イ、どんぐりの背比べ      ウ、水と油      エ、月とすっぽん

問六 〓線部 ①「ある意味、ほとんどが思い込みだとさえ言えるかもしれない」とあるが、それはどういうことか。その説

明として適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、周囲に情報や知識があふれているために、うまく選択できないまま自分本位な基準ができてしまっていること。
- 2、ほとんど自分で調査もせず思い込みに近い情報や知識によって、誤った価値基準で行動してしまっていること。
- 3、もともと自分の限られた経験の範囲から得た情報や知識だけで、一定の行動基準を決めてしまっていること。
- 4、自分が選んだ知識や情報に自信があるせいで、自分の認識に近い基準でルールができてしまっていること。



問七

——線部②「フィールドワーク」とあるが、その例として適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、震災で被害を受けた地域がボランティアを募集していたので、仲間数人に声をかけて参加してみた。
- 2、テレビで、人気アニメのランキングに納得がいかなかったので、親友にどう思うか聞いてみた。
- 3、苦手な勉強で難しくてわからない部分があったので、大学生の姉に教えてもらいに行った。
- 4、雑誌に紹介されていた評判のよい飲食店が偶然近所だったので、直接足を運んで自分も食べてみた。

問八

③に入る小見出しとして適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、フィールドワークの多面的な意義
- 2、フィールドワークの一面的な思考
- 3、フィールドワークの主観的な理解
- 4、フィールドワークの客観的な結果

問九

——線部④「妥当性がそこで揺らぐ」とはどういうことか。その説明として適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、知りたいことについてフィールドワークをしても、自分では解釈できない問題があるということ。
- 2、自分があらかじめもっていた仮説や、調査の前提として考えていたものが壊れていくということ。
- 3、文献や資料に書かれていることと自分の解釈が異なり、混乱してしまう場合があるということ。
- 4、従来の認識から外れるような情報は、信用できるものであっても受け入れがたいということ。

問十

——線部⑤「現場は、でこぼこしています」とあるが、どういうことか。「情報」という語を用いて二十五字以内で答えなさい。

問十一 — 線部⑥「『学び』の場」と同じ内容を表すことばを文中から十字程度でぬき出しなさい。

問十二

- ⑦、⑧に入ることばの組み合わせとして適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。
- 1、⑦ 分析的 ⑧ 感覚的
  - 2、⑦ 現実的 ⑧ 肯定的
  - 3、⑦ 平面的 ⑧ 積極的
  - 4、⑦ 批判的 ⑧ 立体的

問十三

本文の内容と合っているものを次の中から二つ選び、番号で答えなさい。

- 1、SNSなどで個人が情報を発信する際は、あらゆる角度から物事の因果関係をはっきりと示す必要がある。
- 2、さまざまな情報は、あくまで個人的な視点や方法で調査された結果でしかなく、安易に信用すると危険である。
- 3、自分の認識とは異なる情報に接した場合、それらが真実かどうか、実際に自分で確かめてみるのが大切である。
- 4、情報を得る上で最も大事なことは、テレビのニュースやネットなどたくさんのメディアにふれることである。
- 5、フィールドワークの本来の目的は、それぞれの人がもっている考え方の枠組みを修正していくことにある。
- 6、たとえ自分で現場に向いて調べた情報が文献に書かれている通りであっても、自ら学ぶ過程に意味がある。

